

地元学・地域学の系譜

—「都市民俗生活誌」の成果から—

内田 忠賢（奈良女子大学研究院人文科学系教授）

1 はじめに

拙稿を書くきっかけは、筆者が申請代表者となり、奈良女子大学が2015年度に採択された文部科学省「地（知）の拠点」（COC+）事業への経費補助期間が昨（2019）年度で終了し、一区切りついたからである。COC+に先行した2013年度、2014年度に募集されたCOC（事業名は同じく「地（知）の拠点」）は、地域へ関心を向けさせる、単純かつ純粋な教育プログラム支援事業であった。しかし、COC+は、地域志向教育のプログラムというよりも、事業に採択された大学が、自ら所在する道府県に学生たちを就職、定着させる就職支援プログラム、政府が推進するいわゆる「地方創生」に沿うプログラムであった。

教育的な志が、COCに比べ、COC+が低いと、必ずしも言っているわけではない。どちらも、学生の目を地元、地域に向けさせる良い機会になった。特に、学生の地元出身者比率が著しく低い奈良女子大学にとって、それなりに意義があった。いや、事業自体は経費補助期間が終了しても継続されるので、地元志向、地域志向の教育プログラムがあることには、引き続き一定の意義があろう。全国区の高等教育機関であった女子高等師範学校を前身とし、現在も全国区を自認する奈良女子大学であるが、東京ではなく、地方に立地する国立大学であるという事実は、奈良、関西、近畿地方などを学ぶ教育プログラムを提供する義務があると、筆者は考えている。

前置きが長くなった。地元、地域を学ぶことには、教育的に意義があると主張したかった。この場合の教育とは、高等教育、初等中等教育といういわゆる学校教育だけでなく、社会教育、生涯学習、市民活動をも含意する。

さて、久島桃代「自地域学「会津学」の活動とその理念」という10年前の学術論文がある（久島、2010）。この論文では、福島県会津地方において、住民が自主

的に地元、地域を学ぶ社会教育的な市民活動、生涯学習に着目する。久島は「参加者たちは…地域で生きる人々や生活のあり方を…丹念に記録していくことにより、今後の生き方を考えようと」とすると、総括する（136頁）。地域の生活を記録するという実践は、対外的な派手さが無いが、地元学・地域学の点では意味深いと思う。

会津学だけでなく、住民が地元、地域を元気づけようという自主的な活動は、これまで盛んに実践されている。本稿は、戦後日本における地元学・地域学の系譜を整理し、筆者が調査研究してきた都市生活の記録（筆者がいう「都市民俗生活誌」）の意義を、地元学・地域学の系譜に位置付けようという試みである。なお、会津学は主に、農山村での伝統的な生活、伝統的な生業を記録しようとした点で、本稿が対象とする都市民俗生活誌の活動とは異なる点を確認しておく。

2 地元学・地域学の展開

戦後日本における地元学・地域学の展開について、すでに高野岳彦（2008）が的確に整理している。1970年代までは、主に研究者のよる地域研究Area Studies、地域科学Regional Studiesの一環として取り組まれた。1980年代には、学校教育の一環として、郷土教育が再評価され、1990年代前半には、社会教育の一環として取り組まれた。さらに、90年代後半には、社会教育、特に生涯教育活動として展開した。2000年以降は、各地で社会教育・生涯学習として定着した。90年代以降の展開の中でも、特に影響力があったのが、結城登美雄と吉本哲郎という東西2人のリーダーたちであった。この2人の影響下で、地元学が確立した。

一方、地元学・地域学の推進主体および地域枠組みによる分類を、廣瀬隆人（2006）が行っている。廣

瀬によれば、①自治体の地域振興・生涯学習としての地域学、②民間団体による地域学、③大学など高等教育機関が行う地域学、④結城登美雄と吉本哲郎が推進した地元学、という分類である。山形県生涯学習文化財団によれば、2016年段階での全国の地域学団体は77（同財団HP）あり、推進主体は実に多用だという。また、廣瀬論文が収録される『季刊東北学』編集部(2006)によれば、「地名+学」は全国で軽く3千は越えるだろうと指摘している。

3 地元学の2人のリーダー

廣瀬(2006)は、宮城県仙台市に住む結城、熊本県水俣市に住む吉本が、それぞれ独自に考案した地元学は、自治体や民間団体とは関係が薄いように分類するが、この2人の情熱が、その後の全国の自治体や民間団体の活動を刺激し、元気づけ、実践に結びつけてきたことは確かであろう。

結城登美雄(1945～)

結城の活動は、仙台市宮城野区の「地元学」講座から始まる。戦後の仙台市の地域活性化の取り組みが、ミニ東京となることを志向し、数字と外見だけ基準をしてきたことを反省すべきだとする。

一方、結城自身は、東北各地の農村での地域づくりに専門家として関わってきた。その中で、東北農村の衰退、地域住民の自信喪失を憂えたという。それぞれの地元の生活文化を生かしながら、大都市との繋がりよりも、周辺地域との繋がりを重視し、そこに農産物を流通させるなどの実践を後押ししてきた。

そして、彼は、住民自身が農山漁村の魅力を発見し、自らが地域に隠れている知恵や資源を学ぶことを主張する。近代化、現代化の中で見えなくなった日常の価値を発見し、そこにある生活者の思いや物語を発見し、記録することを提唱した。喪失した地域性の復権、農山漁村の自信回復を目指す実践である。

結城によれば「カネで測れる以外の地域の環境、文化、コミュニティ、風土、生き方、哲学を発見し伝える」ことが重要だとする。70年代以降の東京志向、中央志向を痛烈に批判した。

吉本哲郎(1948～)

吉本の地元学は、熊本県水俣市をフィールドにす

る。水俣には、公害とその補償問題、行政による復興事業の中で、立場による違いから住民間での長年の対立があり、また、補償や事業に依存する住民意識があった。地域外からの専門家や活動家の介入も、かつて住民意識を混乱させたという。市役所の職員だった吉本は、行政マンとしてだけではなく、地域住民の一人として、この現状を打破したいと考えた。筆者も、前任校(お茶の水女子大学)の地域調査実習の一環として、学生と一緒に、吉本を水俣へ訪ね、情熱溢れるお話を伺ったことがある。

吉本は試行錯誤しながらも、地域住民による、地域の魅力探しの活動を推進した。彼のモットーは「あるもの探し(「ないものねだり」をするな)」つまり「役所に陳情するな」、「自分でできることを考える」である。高度経済成長期の水俣住民の疲弊や自信喪失を憂い、地域住民が行政に依存する(補償要求)する体質を改めたかかったという。

地域外の「専門家」「活動家」を、彼らの立場を理解した上で、積極的に受入れ、地域住民の自覚を促した。地域外の人を拒否するのではなく、彼らを「風の人」として受入れ、地域住民「土の人」に助言してもらうとした。外部の視点なら、地域住民が当たり前として気付かなかった魅力を発見できるという。

地元の「あるもの探し」活動では、住民たちが話し合いながら「地域資源マップ」、「水の経路図」作成するプロセスを提案し、実践した。また、地元の農産物を、水俣病を経験したからこそ、環境に最大限配慮した食べ物だとアピールすることによって、消費者に安心感を与えるという逆転の発想を提案した。また、生産者を「環境マイスター」と認定することにより、彼らの自信を回復させ、販売量、販売額を増やした実践も行った。結城以上に、吉本は実践的で行動的な地元学を推進した。

次章から、筆者自身が取り組んだ「都市民俗生活誌」の調査結果を紹介し、また、それらを生み出した活動を地元学・地域学の系譜での位置付けを試みたい。

4 都市民俗生活誌

都市民俗生活誌とは、一般市民による、都市生活を記録したモノグラフを指す造語である。私は、都市民俗の生活誌lifography、あるいは、都市の民俗誌および生活誌という意味を込めたい。そこには、伝

統的な生活文化の記録(都市民俗誌)と、近代化・現代化する生活文化の記録(都市生活誌)の2側面がある(内田2003)。研究者からは、素人による、主観的で資料的価値が低い作品群と見なされた。しかし、これらのモノグラフは、住民自らが地域の日常生活を見つめ直し、記録することで相対化し、地域の魅力を発見する作業の成果である。

少し、学史的な説明を補足しよう。民俗学では通常、農山漁村の伝統的な風習や生活を記録したモノグラフを民俗誌と呼ぶ。かつて、柳田國男が調査項目を設定し、全国的に悉皆調査を行ったこともある。しかし、農山漁村さえ都市化した現在では、この民俗調査は、わずかに伝承され、残された民俗を発見し、記録する作業にすぎない。消えゆく民俗を記録する大きな意義は認めるが、現代文化、現代社会を理解する資料には、ならない。

各地の自治体が市町村史『民俗編』として調査し、公開した作品群も、大部分は農山漁村の民俗調査によるものである。『〇〇市史』であっても、都市生活の記録は少ない。変貌し続ける都市生活の記録は、文化財的には価値が低いものとされてきた。『民俗編』の記述の多くは、新旧住民が混住化した地域における旧住民の、しかも静態的な記録である。

繰り返せば、現代生活は動態的であり、その変化がある時点で記録する作業には、相当な価値があると考ええる。文化財としては、変化しない、ドライフラワー的な事象が評価されるかもしれないが、それでは現代生活を把握することはできない。民俗という語が不適当ならば、現代風俗と呼びかえても構わない。

内田(2003)では、都市民俗生活誌の可能性として、6点を指摘した。詳細は拙稿に譲るとして、短く説明しよう。

- ① 都市性の発見 たとえば、民俗調査では、方言や地域独自の呼称に注目する。しかし、鉾山町や旧軍隊町を調査すれば、「うちの町では方言がない」と地域住民から伺うことがある。各地から人々が集まり、交流する中で、方言が淘汰された結果と考えられる。旧来の民俗調査では無視される事実である。
- ② 総体としての生活 項目別の悉皆調査では、生活実感が捨象される。いわゆる素人による生活

記録には、生活の総体を実感として記録するという特徴がある。

- ③ 生活の動態的把握 たとえば、旧来の民俗調査では、バレンタインデーやクリスマス、その変化は無視される。日常生活では、重要な年中行事にもかかわらず、調査報告では記録されない。多数を占めるサラリーマン、OLの生活記録も民俗調査では対象としない。
- ④ 外部からの視線 都市とは流動的な社会、匿名的な社会である。たとえば、盛り場をフィールドにする場合、そこで暮らし、そこで生活の糧を得る人々だけに注目するのは一面的であろう。盛り場には、来訪者の賑わいが不可欠である。彼らの視線からの記録も欠かせない。また、いわゆる外国人の視線からの記録も重要であろう。
- ⑤ ミクロな視点 これは、旧来の民俗学も重視した点である。俯瞰、鳥瞰するのではなく、個別具体的な、しかも、個人名さえ記される記録である。
- ⑥ 多様な都市の確認 以上を考えると、様々な都市生活のあり方を認めることになる。極論すれば、百人いたら、百人それぞれの都市生活があってよい。都市生活の共通性と同時に、相違点を確認する意義はあろう。

5 都市民俗生活誌の作品群

都市民俗生活誌を具体的に説明してみたい。筆者は科学研究費(研究代表者:内田、課題番号12610306、2000~2002)を活用し、47都道府県の主な公立図書館を訪れ5千点以上の作品を直接、閲覧し、そのうち468作品を精読・整理した。ただし、『都市民俗生活誌文献目録』という単行本として公開できたのは、調査終了の10年後である(内田2012)。したがって、筆者が精読した資料群は、2002年現在、主要な公立図書館に所蔵・配架された作品群であることが前提である。

大まかに言えば、1980年代以降、都市民俗生活誌と分類できる作品が多く出版された。都市生活の変貌ぶりが加速し、その過去や現在の姿を記録し残そうと考える人が増えたものと思われる。また、自分史の執筆・流行、さらに手軽に自費出版できるシステムが確立した背景があろう。まさに、地域生活の過去や現在の姿を記録し、生活変化を後世に残す地

元学・地域学の実践である。2000年代以降、それらの作品は激減する印象がある。生活記録が活字メディアではなく、Web上に移行したせいかもしれない。

作品には、東京都内の記録がもっとも多く(141点)、京都市(54点)・金沢市(43点)ほか歴史都市の記録、また、郷土意識が高い長野県内(22点)の記録が多い。活動が長く続いた実践例としては『さっぽろ文庫』(札幌市教育委員会編、北海道新聞社発行)、『もりおか物語』(盛岡の歴史を語る会、熊谷印刷出版部発行)、『シャベルー語り継ぐ町の歴史-』(高齢者セミナー編、川崎市教育文化会館発行)、『老舗の町 尾張町シリーズ』(石野虎一編著、金沢市尾張町商店街振興組合・尾張町若手会発行)、『旧四日市を語る』(旧四日市を語る会編・発行)などがある。このうち、本章では、『旧四日市を語る』以外の4シリーズを紹介したい。いずれも、市民による都市民俗生活誌の実践であり、その執筆、編集、発行へ至る活動はまさに地元学・地域学と呼べる。

『さっぽろ文庫』 1977年から2002年まで発行された記録である。札幌市教育委員会が主導し、市民のエッセイなどを収録する。全100巻。このうち、札幌市民による日常生活の記録、街の生活の記録は14冊にすぎないが、職人の仕事別に聞き書きした『職人物語』(第27巻)、家庭の日常食や外食事情などを記録した『札幌食物誌』(第31巻)、札幌に暮らす外国人が生活を語る『外国人たち』(第60巻)、老舗商店の日常を記録した『老舗と境界』(第78巻)、商店街やスーパーマーケットの商売や日常を聞き書きした『札幌の商い』(第88巻)など、それら聞き書き、生活記録は都市生活民俗誌に相応しい作品群が収められている。なお、全100巻の概要は現在、札幌市HPで閲覧できる。

<https://www.city.sapporo.jp/kobunshokan/kankobutsu/bunko/>

(最終閲覧日2020年11月30日)

『盛岡物語』 1973年から1979年まで発行された記録である。盛岡市役所市民生活課に事務局を置いた市民グループ「盛岡の歴史を語る会」が編集した。全10巻。市内をエリア分けし、市民からの地域生活、日常生活のエッセイを集めた。市役所に事務局はあるが、市民グループの自主的な活動である。

『シャベルー語り継ぐ町の歴史-』 1992年から1998年まで発行された記録である。川崎市教育文化会館に事務局が置かれた高齢者セミナー「私達のまちの歴史を掘り起こそう」が編集した。全7巻。川崎という工業都市の、明治から昭和の日常生活を、聞き書きやエッセイで記録する。たとえば、「私たちの町と終戦直後」(第6巻所収)、「市民たちの文化 - 映画館と盛り場・文化運動」(第7巻所収)、「ヤミ市からマーケットへ」(第7巻所収)などの特集には、興味深い市民生活の記録である。生涯教育の実践としても、高く評価されよう。

『老舗の街・尾張町シリーズ』 1982年から2009年まで発行された商人町の生活記録。全27巻の小冊子。金沢市尾張町に暮らし商売をする石野虎一(宝生流教授でもある)が、繁華街に暮らす商人の日常を、1巻に1人ずつ聞き書きした。第9巻が『尾張町商人を支えた女たち』、第12巻以降は『尾張町を支えた女たち』シリーズである。『尾張町を支えた女たち』シリーズには、「郷土玩具と共に暮らして」(第12巻)、「ソロバンから能楽師を選んだ夫とともに」(第14巻)、「浅野川の流れに味を生かして百年」(第15巻)など、興味深い聞き書きがなされている。行政とは無関係な地元学・地域学の実践、自主的な生活記録の活動である。なお、幸いにも、尾張町で開業する(株)石野テントHPで、全文が閲覧できる。

<http://www.ishinotent.co.jp/Tentou/book.html>

(最終閲覧日2020年11月30日)

6 都市民俗生活誌を軸にした活動—旧四日市を語る会—

三重県四日市市の市民による自主的な活動、生活を記録する実践である。その成果は、『旧四日市を語る』という小冊子にまとめられ、自費出版された。都市民俗生活誌の格好の事例である。港町、旧宿場町、旧市場町、工業都市の街の記録である。

『旧四日市を語る』は第1集(初版1989年、改訂版1990年、改訂2版1991年の発行)から第25集(2015年)まで、26年間、編集・発行された。第9集までは、戦前の市街地の日常生活、祭り、遊び、職、言葉、事件など自由に語り合い、記録する作品である。第10集

以降は戦後、高度経済成長期の生活も記録する。それぞれの冊子は、「思い出」（あるいは「思い出すことなど」）、「回顧」、「証言」などの章で構成される。

この活動が始まった昭和63年（1988年）の趣旨、その後の活動について、この会の主催者、岡野繁松は『旧四日市研究』第8号（1995年）に次のように記している。

「旧四日市には文化財が少ない、文化不毛の地と言いつけられて来た。…しかし、過ぎ去った事や失った物が今でも心の中に生きている。繁栄していた町筋などがその一つである。私達はそれらを、心の文化財と言ってもいいのではないかと話し合った。…思い出せることはどんなことでもいいから思い出し、それに就いて語り合うことにした。漠然と語り合っても広がりすぎるといことで、昭和10年頃から一五年頃に一区切ることにした…私達の記憶の一番確かな時期であった」（55頁、原文は縦書き、以下同じ、『旧四日市を語る』第1集の前書きを引用）

岡松によれば、地域に関する身近な、素朴な疑問から、この会を主催したいと考えたという。参加者もそれぞれ、地域に関する話題を持ち寄った。第2回の会合では、次のような状況だったという。

「ドブはどこからどこへ、北町・南町・西新町の色街の様子から話は公衆便所へ飛ぶ、夜市、火葬場、旧図書館、映画館、がいつ、がいら、しもた屋、さんまい、ザーザーなどの方言、鼠の死骸は警察署や交番へ持って行ったというよりも売りに行った、二銭いや三銭…とにかく、言いたい事、思い出せる事を言ってもらい、それが刺激剤となって膨らんで行く」（59・60頁）

岡松は『旧四日市を語る』第1～5集の「思い出すこと」「思い出」に収めた項目を、列挙する（60～64頁）。いずれも、会合の参加者が語り合った記録である。交通28、官庁15、市内の様子18、祭り・縁日10、職業8、ことば7、生活45、寺社7、学校48、戦時下の思い出55、その他20である。たとえば、「女の出札係」、「東洋紡績」、「午起（うまおこし）海水浴場」（括弧内は筆者）、「パチンコ」、「ラジオ体操」、「早起会」などの話題で、参加者が盛り上がったようである。

また、第1～5集にはそれぞれ、市民個人が寄稿し

た「回顧」が収録される。岡松は寄稿された内容を分類し、その項目を大量に列挙する（62～64頁）。分類としては、家業・職業・店屋、寺院、家庭、災害、町、学校、祭り、映画・劇場、子供の頃、空襲、その他である。具体的な内容としては、たとえば「呉服商の思い出」、「畳屋職」、「開業医の家族と生活」、「戦前の商家の生活」、「昭和初期の家庭での年中行事」などである。

その活動について、岡松は次のように記す。

「参加できる時に参加する。参加できなければ後日発行する瓦版で知ってもらい、確かめ合う。言わば語る会の出前である。思っている事、思い出した事、体験した事、実際に見たこと聞いた事を話す。曖昧であっても言い、言うことが大切。もし間違っていたら誰かが直してくれる。それを期待して喋る。途中でしゃべれない時は途中でいい言い、後は誰かが思い出して継いでくれる。自信のない語りは、それが促進剤となればいいと考えて喋れば良い。」（64頁）

語る会のメンバーは、頻繁に会合を開き、また思い出が寄稿できる冊子を定期発行した。それだけでなく、彼らは、昔の子供の遊びを、地域の幼稚園児などとの交流の中で伝え、また、参加者が一緒に市街地を散策するイベントも開催した。さらに、行政と連携し、町づくりマップの作成、町並み整備への提案などを行った。商店主らとの交流から、街の歴史を確認し、商店街のありかたも議論したという。

冒頭に紹介した会津学の活動よりも、洗練されていないかもしれないが、地元学・地域学の活動実践の代表格と認められよう。

なお、旧四日市を語る会の活動の様子は、画像を含め、下記の「まなぼうや通信」HPでも紹介されている。

http://www.manabouya.com/manabouya/vol_13/06/index.html

（最終閲覧日2020年11月30日）

7 おわりに

筆者が当初、『都市民俗生活誌文献目録』を編んだ目的は、村落に関する民俗資料の目録（あるいは、目録に該当する研究成果）が多数あるのに対し、都市の民俗に関するそれを作成することであった。全国的

な悉皆調査が必要だと考えたからである。

民俗誌の資料集成も同様で、『日本民俗誌集成』や『日本民俗文化資料集成』（いずれも三一書房刊）をはじめ、全国各地の市町村史・民俗編などにおいて、村落の伝統的な社会・文化をめぐる貴重な一次資料が収集、整理されたのに対し、都市の社会・文化をめぐる民俗誌的、生活誌的な資料集成はなかった。後者に関しては、2000年代に、民俗学者の倉石忠彦、小林忠雄、社会学者の有末賢と地理学者の筆者が編んだ『都市民俗生活誌』（全3巻、明石書店、2002～2005年）が初めての試みだった。

一方、本稿の冒頭や本文中に繰り返し指摘したように、都市生活を語り、記録し、編集・公刊する活動は、地元学・地域学の実践として高く評価できる。都市民俗生活誌の実践は、まさに地元学・地域学なのである。

第5・6章で紹介した、長期にわたる熱心な市民活動だけでなく、いわゆる地元学・地域学を意識していない個人的な記録実践も、地元学・地域学の成果に含めても構わないように考えている。筆者が編んだ『都市民俗生活誌文献目録』に収録したサラリーマン、OL、専業主婦、単身赴任者、外国人、来訪者の記録も、資料の価値が低いとは言えない。多様な都市生活のありかたを再確認でき、都市を動態的に記録する。人々が地域の日常生活を記録し、価値を見だし、魅力を発見する活動である。第5・6章では扱わなかった、それら都市民俗生活誌を地元学・地域学として評価する作業は、今後の課題としたい。

なお、筆者が都市民俗生活誌資料を閲覧して以降も勿論、この資料群に分類される作品は多くはないが確認している。たとえば、北海道新聞社函館支社報道部編『函館散歩—まちは唄う—』（北海道新聞社、2003年）、同『函館散歩—続・まちは唄う—』（北海道新聞社、2007年）や高知市史編さん委員会編『地方都市の暮らしと幸せ 高知市史・民俗編』（高知市、2014年）などである。新しい高知市史は、旧来の民俗編とは、まったく異なり、変化する暮らし、風俗を記録する（内田、2015）。

また、個人がWeb上に書き込む都市生活の記録を、都市民俗生活誌に含めて議論することも今後の課題である。活字媒体の記録は激減し、Web資料が激増しているのは間違いないからである。

附記 本稿は、日本地理学会2020年秋季大会にて報告した内容（ポスター no.168、オンデマンド）の一部である。なお、報告では、奈良女子大学なら学研究センターが推進する「なら学」の、地元学・地域学での位置付けにも言及したが、本稿からは省いている。

文献

- 久島桃代（2010）「自地域活動「会津学」の活動とその理念」、季刊地理学62
- 高野岳彦（2008）「自地域学ムーブメントと「地域学」の分類試論」、地理53-6
- 廣瀬隆人（2006）「地域学・地元学の現状と展望—その分類学的考察」、季刊東北学2-6
- 結城登美雄（2009）『地元学からの出発』、農山漁村文化協会
- 吉本哲郎（1995）『私の地元学』、NECクリエイティブ
- 吉本哲郎（2000）『地元学をはじめよう、』岩波ジュニア新書
- 内田忠賢（1998）「都市」、福田アジオ他監修『日本民俗大辞典』、吉川弘文館
- 内田忠賢ほか編（2002～05）『都市民俗生活誌（全3巻）』、明石書店
- 内田忠賢（2003）「都市民俗生活誌の可能性」、国立歴史民俗博物館研究報告103
- 内田忠賢（2005）「「都市」再考の試み」、現代伝承研究会編『現代伝承論—民俗の再発見—』、岩田書院
- 内田忠賢編（2012）『都市民俗生活誌文献目録（都市民俗 基本論文集 別冊2）』、岩田書院、現物の一部は次頁[参考]。
- 内田忠賢編（2015）書評「高知市史編さん委員会民俗部会編『地方都市の暮らしとしあわせ—高知市史・民俗編—』」、日本民俗学284

[参考]

<div>24</div> <div><div>宮城県</div><div>宮城県図書館(981-3205 仙台市泉区紫山1-1-1 TEL022-377-8441)→[県] 仙台市立 榴 岡図書館(983-0852 宮城野区榴岡4-1-8 TEL022-295-0880) →[市]</div></div> <div><div>■仙台市</div><div>仙台の年中行事 [県] 編：仙台市産業部（著：大友幸三郎） 発行：仙台観光協会 昭和15年2月 四六／47頁 市街地の年中行事。</div><div>仙台あそここのころ八十八年 [県] 編：仙台八十八選選定委員会 監：三原良吉 発行：宝文堂（仙台市） 昭和53年1月 A5／297頁／980円 明治から昭和の出来事や生活、および地域ごとの生活を、多数の市民が描く。</div><div>仙台屋台誌 [市] 著：村上善男 発行：駒込書房（東京都） 昭和55年12月 B6／118頁 盛り場で活躍する屋台のルポルタージュ。</div><div>まち 河原町：その歴史と街なみ [市] 編：伊勢民夫・鵜飼幸子</div></div>	<div>宮城県 25</div> <div>発行：河原町一丁目街づくり委員会 昭和57年3月（第2刷58年1月） B6／112頁／1800円 第2部「聞き書き わたしの河原町」では、地域の生活や事件を7人の古老が語る。</div> <div>仙台あちこち [市] 著：佐々久（図書館長、美術館長） 発行：宝文堂（仙台市） 昭和57年8月 B6変／137頁／1200円 市内各地域の歴史と生活の変遷。</div> <div>仙台的珍談・奇談 [市] 著：田村昭（郷土史家、『仙台花街繁盛記』の著者） 発行：宝文堂（仙台市） 昭和59年2月 B6／101頁／480円 「まち」「ひと」「たてものとはなし」「寺社と祀祠堂」「じけん」「その他」「コラム」の章があり、市中の生活と伝承が紹介される。</div> <div>宮城風土記 第2巻 仙台夜の顔 国分町ほか [市] 編：朝日新聞仙台支局 発行：宝文堂（仙台市） 昭和60年4月 B5／274頁／1100円 「国分町かいわい」（5～119頁）で、盛り場の実態や生活が描かれる。</div> <div>番丁詳伝 [県] 編：番丁詳伝編集委員会 発行：一・四・一（仙台市） 昭和62年3月 B6／227頁 盛り場の生活記録。</div>
<div>162</div> <div><div>島根県</div><div>島根県立図書館(690-0873 松江市内中原町52 TEL0852-22-5725)→[県] 松江市立図書館(690-0017 松江市西津田6-5-44 TEL0852-27-3220)→[市]</div></div> <div><div>■松江市</div><div>松江八百八町町内物語：白湯の巻 編・発行：山陰日々新聞社【初版】、松江八百八町刊行の会【再版】 昭和30年【初版】、平成8年8月【再版】 A5／350頁／3000円【再版】 巻頭には「松江八百八町町内物語：白湯町民史」とある。松江旧市街の歴史と生活を記録。江戸時代の話もあるが、多くは明治から昭和初期の街の様子を記す。</div><div>旧制松高物語 [県] 編：朝日新聞松江支局 発行：松江今井書店（松江市） 昭和43年10月 B6／198頁／500円 市街地にあった旧制高校の回想録だが、昭和初期の学生の暮らしと街の関わりが、随所に記録される。</div><div>松江わが町 [市] 著：漢東種一郎（明43年生／松江市収入役） 絵：福田茂宏（大13年生／画家） 発行：松江今井書店（松江市） 昭和60年10月 B5変形／145頁／3200円 文章では、大正時代の旧城下町の生活が記録されるが、挿絵は昭和60年頃の風景である。</div></div>	<div>島根県 163</div> <div>わがまち 城北：ふれあいを求めて [市] 編・発行：城北地区ふるさとづくり推進委員会（松江市） 平成6年1月 A4／86頁 特に、第4章「わがまち城北そぞろ歩き」（17～63頁）、第5章「城北いきいき歳時記」（64～78頁）で街の日常生活が描かれる。</div> <div>松江市南ヶ丘（南ヶ丘町内会発足四十周年記念誌）[市] 編・発行：南ヶ丘町内会記念誌編集委員会 平成13年9月 B5／170頁 郊外住宅地の生活記録。前半で町内の出来事が、後半で街の思い出などのエッセイが収録される。</div> <div>松江365日 [市] 著：森口保（昭6年和歌山生／島根県工業試験場、島根県工業センター、島根観光学会副会長） 発行：ハーベスト出版（松江市） 平成14年6月 A5／211頁／1800円 1年の毎日ごとに、明治から平成にかけての、その日の松江の街の出来事を当時の生活を交えて記述。</div>

